

システムズアプローチにおける ジョイニングに関する一考察

田 中 智 之

1. 目的

システムズアプローチの治療過程において、その過程の初期の段階で行われるものとしてジョイニングがある。ジョイニングとは、そもそも Minuchin, S (1974) により Structural Family Therapy での家族との治療関係の作り方の特徴を示す用語として示されたものである。それは、治療者と家族との間で起こる治療システムの形成につながるカップリングの過程であるとされ、ジョイニングを行うことにより、家族に受け入れられ、治療期間中その位置に留まり続けられるとされている。つまり、構造的家族療法において、家族の中に入れてもらい、治療的な関係を築くための指標であると考えられる。日本において、ジョイニングは、拡大解釈され使用されていることが指摘されている（吉川, 2004）。日本におけるシステム論的家族療法やシステムズアプローチの実践において、一般的に必要不可欠である（吉川, 1993）と言われるのをはじめとし、ジョイニングは、今やどの家族療法のオリエンテーションにおいても行われるべきものとして考えられている。このように、日本の家族療法においてジョイニングは、基本的な治療関係を築く上で必要となるものとして考えられているが、遊佐（1984）によると、ジョイニングの技法は、トラッキング、アコモデーション、マイムの3つに分類されている。トラッキングとは、治療者が家族にいままでどおりコミュニケーションや行動を続けるように支持し、家族のそのような交流の流れに逆らわずにしたがっていくことである。アコモデーションは、治療者が家族交流のルールを尊重し、それに従うことであり、マイムは、治療者が家族の言語や非言語的行動を取り入れて、それらを模倣することである。加えて、吉川（1993）は、以下の5点をジョイニングとして挙げている。

1. 患者・家族と治療者に共通する社会的な話題を設定し、対立的ではなく、親和的な雰囲気を作ること。

2. 支持的なコメントを多用する際には、治療者自身が持っているコミュニケーションの特徴を少しずつ提示していくこと。
3. 患者・家族が複数メンバーで治療者の面前にある場合のジョイニングは、各メンバーの最大公約数的な部分に対応するという方法よりも、むしろ中立的な態度を示すことができるようにすること。
4. 患者・家族が既に提示している情報から、治療者が類推できる情報を整理し、話題の流れに無理がなければ、まだ話されていない話題であっても、治療者の側から積極的な共感を行うこと。
5. 言語的な共感や支持以上に、治療者の非言語的なコミュニケーションを積極的に用いての相互作用に重点をおくこと。

また、吉川（1993）は、このようなジョイニング過程の重要性は、技法としての「ジョイニング」の効果以上に、システムズアプローチで不可欠な「治療システムの形成」という問題と関連していると述べており、その後の治療的行為の有効性や治療進展に大きな影響を与えることが考えられる。まさに、ジョイニングは治療の初期段階において、最も重要な課題の一つであると考えられる。ジョイニングの対象については、システム論的家族療法などにおいては、その治療対象が家族に限定されている。一方、システムズアプローチにおいては、家族のみに留まらず、問題とされている本人を取り巻く関係者まで治療対象が広げられていることから、範囲に多少の違いがある。このように理論的背景の違いから、治療者側は治療対象者の範囲をどこまで視野に入れる必要があるかという論争があるものの、複数を治療対象と捉え行われる面接において、ジョイニングが治療上基本となるもので、その重要性は明白である（東, 1993, 吉川, 1993）。

これまでの日本における研究においては、ジョイニングの有効性と、ジョイニングのカテゴリー化がなされた研究がある。久保山（2005）では、ジョイニングの有効性を明らかにするため、実際の面接場面から、特にトラッキングに焦点を当て、具体的な対応として何が有効であるかの検討が行われている。また、久持（2005）は、ジョイニングのカテゴリー生成を目的とした質的研究であり、特にトラッキングの具体化の研究であると捉えることができる。これらの研究では、遊佐（1984）のジョイニングの定義に従い、その構成要素の検討や、有効性が述べられているに留まっている。いずれの研究でも、初回面接での治療場面が研究対象とされているが、初回面接の中だけでも、情報収集、仮説設定、働きかけなど様々な治療過程が含まれていることが考えられる。これらいくつもの過程や要素を混在させたままで、ジョイニングの効果や、要素を捉えようとすることは、ジョイニングの定義自体がより曖昧なものとなり、

ジョイニングの有効性や要素を明確にすることが困難であると考えられる。

今後、ジョイニングの研究を行うに当たり、ジョイニングの再定義が必須であると考えられる。そこで本研究では、ジョイニングを再定義するために必要な、ジョイニングの探索的研究を行うことを目的とする。

2. 方法

本研究では、システムズアプローチによる実際の面接過程を逐語化し分析を行う。面接場面は、特にジョイニングが表れやすい初回面接とする。分析方法は、逐語の前後関係や、クライアントが置かれている状況から、言語的（一部非言語的）メッセージが発せられた文脈的意図を分析し、それに対するクライアントとセラピスト（以下、Thとする）それぞれの対応についての記述を行い表にまとめる。また以後、クライアントは、「患者と見なされた人」の意味である Identified Patient（以下、IPとする）と呼ぶこととする。

面接概要

IP：高校1年生女子

主訴：学校を辞めたい

家族：父親（会社員）、母親（パート勤務）、IP（高1）、弟（中1）、妹（小3）

来談経緯：小学校高学年より怠学傾向。登校を促す友人からの働きかけに過敏に反応して自室に籠城するなど、被害的な反応を繰り返していた。中学入学後も、ほとんど誰とも関わりを持たず孤立し、欠席・遅刻・早退となっていたため、担任が指導をしたが、何度か自傷行為（窓から飛び降りそうになる・ハサミで体を刺すなど）を示したため、教員の関わりもなくなった。唯一、家庭教師との関わりだけは保てており、学習への取り組みはしていた。家族も成績が低下しない限り、本人に働きかけることはなかった。欠席が多いため私立高校の特進クラスに入学し一応の適応を示していたが、常に孤立していた。中間テスト後に友人との話を被害的に受け取り、保健室へ避難。「学校に馴染めない、怠学する」と訴えたため、スクールカウンセラーである Th との面接が開始された。

来談時の様子：IP は養護教諭に促されて入室した。社交的な話題で働きかけ、一応儀礼的に少し反応はするが、心ここに在らずといった風情で、部屋を落ちつきなく眺め、その一方でセラピストをちらちら見たりしていた。

その他：初回面接後、IP は初めてにこにこしていたとのこと。教員が「どうやった」と聞くと、IP は笑っており、「また入れとうか」と聞くと「お願いします」と返答したとのこと。その後、IP との面接を何回か継続し、両親と IP 間の相互作用の変化が見られ、

問題とされていた行動は減少し、面接を終結した。

3. 結果

結果は、初回面接全体を、あるまとまった流れで大きく4つに区切り、それぞれIPの示すメッセージとそれに対するThの対応を分析したものを、それぞれ表1～4としてまとめた。表は、以下に示す。

表1. 分析結果①

№	話し手	言語（非言語）的応対	文脈的意図	対応
1	Th	学校辞めたいって聞いたんだけど		対話の話題を投げる
2	IP	(キッとした目つきで反応)	拒否・反発	非言語対応
3	Th	何かあったのかな？	主訴にまつわる話題を扱い話の切り口をつくる	質問を投げる
4	IP	……誰がそんなこと言ったの？	懐疑的	質問で返答
5	Th	僕が直接聞いたのは、今一緒にきた養護の先生で、詳しくは何も聞いていないってことだったよ。	状況を詳しく説明	質問に返答
6	IP	…（じっと顔を眺めながら）…あんた、誰やったっけ？	話題を変える	さらに質問
7	Th	うん、この学校にきてるカウンセラーの□□です。	本人の意図通り応対	質問に対する内容的コメント
8	IP	…ここは応接室でしょ、こんなところで何するの？	挑戦的/相談に対して懐疑的	さらに質問
9	Th	そうやね、他に相談の部屋がないから、だいたいいつもここで保護者の人や生徒さんの話を聞いている。ここは初めて？	本人の意図通り応対、最後質問を振る	質問への返答／IPに質問
10	IP	……ふつうこんなところは入らへん。何か暗いな、この部屋。		Thの質問に返答／感想を述べる
11	Th	そやね、窓は大きいけど影になってるし、間接照明やからね。	IPに合わせるコメント	部屋についての説明
12	IP	…それで何の話をするの？	本題について触れるコメント	もとに話題を戻す質問
13	Th	急に学校辞めたいって言ってるってことだったから、何かあったのかなあって、ホント、何かあったの？	再度主訴にまつわる話題を振り、話すことを促す	主訴にまつわる話題を振る
14	IP	……別に…それで何の話をするの？	主訴についてはまだ話したくない	Thにより詳しい説明を求める
15	Th	ごめん、僕もよくわかってないまゐいろいろ聞いたから、よけいいろんな心配させてしまったと思うけど。		これまでの対応を謝罪
16	IP	…（ちらちら顔を眺めながら）…何で謝るの、もうええわ、こんなん。…	Thの対応に困惑	Thへのクレーム的コメント
17	Th	ごめん、あっ、またいらんことして謝ってもた。そやなこんな雰囲気しんどいわなあ、僕もこんなん苦手や。	IPの心情風景に合わせる	再び謝罪
18	IP	何が苦手やの、こんなところ呼び出しといて、このまま帰れっていうの？	相談を行う意図があったことを示唆	Thを責めるコメント
19	Th	…そやね、うーん、どないしようかなあ。…ほな、悪いけど勝手にいろいろ聞くけどいいかな？	今後Thから話題を投げることへの了解を求める	謝罪しつつ、対話を入口に戻すためのコメント
20	IP	……何でも聞いてください。	Thの意図を了解	

分析結果①では、面接室に IP が来談後、相談を開始してすぐの、冒頭での Th—IP 間のやり取り部分である。

No.1 で Th 対応では、「対話の切り口となる話題を投げ」、コミュニケーションを始めるが、No.2 の IP は、(キューとした目つきで反応) していることから、文脈的意図は『拒否・反発』という結果となった。さらに、No.3 の Th では、再び IP に対して質問を投げており、文脈的意図は『主訴にまつわる話題を扱い話の切り口を作る』ということであった。しかし No.4、IP の対応では、「質問で返答」との結果となり、さらに文脈的意図では『懐疑的』となった。No.5、Th 対応では IP の「質問に返答」するも、No.6、IP ではそれに対する反応は、「さらに質問」をするという形になり『話題を変える』という結果となった。そのため No.7、Th の対応では、IP の「質問に対する内容的コメント」を行うことで『本人の意図通り対応』しているという結果が示された。No.8、IP は「さらに質問」を重ね、No.9、Th の対応では「質問への返答」を行い、最後に「IP に質問」を返している。No.10、IP の対応では、「Th の質問に返答」しながらも、部屋に関する個人的な「感想を述べる」という対応を取っている。No.11、Th は「部屋についての説明」を行うことで、『IP に合わせるコメント』を行っている。そうすると次に、No.12、IP は、対話を相談の入口である「もとに話題に戻す質問」を行い、『本題について触れるコメント』を行っている。No.13、Th は、それに対して「主訴にまつわる話題を振る」という行動をし、IP に対して『再度主訴にまつわる話題を振り、話すことを促す』ことをしているが、No.14、IP では『主訴についてはまだ話したくない』という意図を示す結果となり、「Th により詳しい説明を求める」対応を取っている。No.15、Th から「これまでの対応を謝罪」するが、No.16、IP は、「Th へのクレーム的コメント」を行い、事前の『Th の対応に困惑』していることが示された。No.16、Th では、その『IP の心情風景に合わせる』ため、「再び謝罪」を行ったことが示され、No.18、IP は「Th を責めるコメント」を行い、本来『相談を行う意図があったことを示唆』している。そのため、No.19、Th は、「謝罪しつつ、話題を入口に戻すためのコメント」を行い、文脈的意図としては、IP に『今後 Th から話題を投げることへの了解を求める』という結果が示され、No.20、IP は『Th の意図を了解』したことが結果として示された。

表 2. 分析結果②

No	話し手	言語（非言語）的応対	文脈的意図	対応
21	Th	それやったらまず、今何組やったっけ？	IP の了解に基づき質問を開始	IP が話しやすいであろう話題から振る
22	IP	… 1 組。	話題に回答するもスムーズではない	一言で返答
23	Th	1 組やったら、特進やろ？	話題を広げる、IP の返答形式に合わせる	クローズドクエスション

24	IP	(うなづく)	了解、了承を示す	非言語的反応
25	Th	今年、あのクラス大変やろ？	共感的姿勢を示す	IP が置かれている状況から類推される話題を投げる
26	IP	…何が大変やの？	共感的姿勢に対してやや反発的	疑問形で返答
27	Th	いや、あのクラス今年は12人やってことやし、人間関係しんどいの違う、人数少ないし？	再び共感的姿勢を示す	前のコメントの詳細を明らかにしつつ共感的なコメントを投げる
28	IP	…何でそんなことわかるん？	共感的姿勢に対する反発	疑問形で返答
29	Th	ふつうでも特進でしんどいのに、人数少なかったら人間関係よけいギスギスするやん。	Th のコメントの意図を一般論に戻し、IP の反発に対して釈明する	Th の考えを述べる
30	IP	そんなん関係あらへん。	主訴にまつわることにに対する話題についての抵抗を示す	Th の考えを否定
31	Th	そやな、一般論のことやから。あなた、えっと、名前なんやったっけ？	IP の意図に基づき、同意を示す	IP に同意／異なる話題を質問
32	IP	……〇〇××。		質問に返答
33	Th	そうか、えっと、〇〇さんのこととして話したんじやあなくて、ふつうは人数少なすぎると人間関係も難しいって言うから、そうなのかなって思ったから聞いたの。	一般論の文脈に戻すことで、Th の発言が IP の誤解であったことを示唆	先ほどの Th のコメントの意図を説明

分析結果②は、前分析結果の最後で、相談の入口に戻り、Th から質問を投げかける了解を IP が行い、Th から質問を行行情報収集のやり取りが始まる場面である。

Na21、Th は、『IP の了解に基づき質問を開始』するため、『IP が話しやすいであろう話題から振る』ことで、対話を行おうとしている。それに対し、Na22、IP は、『一言で返答』を行い、『話題に応答するもスムーズではない』ことが示された。Na23、Th は、『話題を広げる、IP の返答形式に合わせる』ために、『クローズドクエスション』を行っている。Na24、IP は『非言語的反応』で『了解、了承を示す』という状態であった。そこで、Na25、Th は、『IP が置かれている状況から類推される話題を投げる』ことで、『共感的姿勢を示す』も、Na26、IP では、『共感的姿勢に対してやや反発的』であり、『疑問形で返答』を行っている。Na27、Th は自身の『前のコメントの詳細を明らかにしつつ共感的コメントを投げる』ということを行い、『再び共感的姿勢を示す』ものの、Na28、IP で同じく『疑問形で返答』をし、Th の『共感的姿勢に対する反発』を示していた。そのため、Na29、Th は、『Th のコメントの意図を一般論に戻し、IP の反発に対して釈明する』という意図のもと、『Th の考えを述べる』対応を行っている。それに対し、Na30、IP は、『Th の考えを否定』するという結果が示された。ここでの文脈的意図は、IP が『主訴にまつわることにに対する話題についての抵抗を示す』という結果となった。Na31、Th は『IP の意図に基づき、同意を示す』ため『IP に同意』し、また『異なる話題を質問』している。Na32、IP はそれに対して『質問に返答』している。Na33、

Th は、「先ほどの Th のコメントの意図を説明」することで、そのコメントを行った意図を、『一般論の文脈に戻すことで、Th の発言が IP の誤解であったことを示唆』しているという結果となった。

表 3. 分析結果③

No	話し手	言語（非言語）的応対	文脈的意図	対応
34	IP	…ふうん。…関係ないけど、おもしろくないのは確か。	Th の説明に納得/新たな枠組みを提示	一部認めるコメントをする
35	Th	クラスがおもしろくないの？	話題を広げる	コメントに対する質問を投げる
36	IP	ぜんぜん	同意	質問に返答
37	Th	ホントは行きたいとこあったの？	さらに話題を広げる	質問を投げる
38	IP	うん。		質問に返答
39	Th	どこ？		質問を投げる
40	IP	◎◎高校。		質問に返答
41	Th	◎◎高校か、特進受かるくらいやったら、大丈夫やったんちがうの？	さらに話題を広げる	質問を投げる
42	IP	…内申があかんかったから…		質問に対して理由を述べる
43	Th	内申の何があかんかったん？頭よかったんやろ？	さらに掘り下げるつつ話題を広げる	さらに質問を投げる
44	IP	遅刻とかが多かったし、…提出物も出してないし…		質問に対して理由を述べる
45	Th	そうか、実力はあったけど、あんまりまじめじゃなかったから、内申で引っかかってしもたんやな。でも、一応は受けたん？	IP が応答したことを Th が受け取ったことを示す／Th が IP を肯定的にとらえていることを示す	受け取ったことをコメント／さらに質問を投げる
46	IP	受けられへんかった。		質問に返答
47	Th	学校があかんって言うたんか？	IP の応答に対してダイレクトに質問	さらに質問を投げる
48	IP	そう、仕方ないからここに来た。	Th の質問に依存せず、自分から枠組みを提示	質問に返答
49	Th	そうか、誰が勧めたん、この学校は？	IP が示した枠組みを明らかにしようとする	さらに質問を投げる
50	IP	お母さん。		質問に返答
51	Th	なんで、お母さんこの出身か？		さらに質問を投げる
52	IP	ちがう、ここで働いてんねん。	Th の質問を訂正し、新たな情報を自ら提示	質問に回答
53	Th	えっ、この先生？		さらに質問を投げる
54	IP	ちがう、食堂で働いてんねん。	Th の質問を訂正し、新たな情報を自ら提示	質問に回答
55	Th	あっそうか、食堂で仕事したはるんや、そうか。じゃあ、この学校がいいでって言われて、それで受けたんや。	話題を整理しつつ、理解したことを示す	回答に対するコメント
56	IP	でも、もう辞めたい。	初めて問題にまつわる話題について自ら提示する	自分の意志に関するコメント
57	Th	なに、やっぱり辞めたいんや？	IP が示したことにのる	IP のコメントを受け取るコメント

58	IP	……こんなとこ来てもしょうがないし、おもしろないねん。	現状の困りごとについて示唆	感情的なコメント
59	Th	そうか。じゃあ、他に行きたいとこでもあるんか？	受け取りつつ、話題を広げる	受け取り、さらに質問する
60	IP	△△高校。		質問に返答
61	Th	△△高校か。何であそこに行きたいの？	話題から外れないよう、さらに広げる	ややオープンな質問を投げかける
62	IP	友達が行ったはるから。		質問に対して理由を述べる
63	Th	中学時代の友達か？	話題から外れないようやりとりを続け、話題を広げる	質問を投げる
64	IP	(うなづく)	同意	非言語的応答
65	Th	よく話すの？	話題から外れないようやりとりを続け、話題を広げる	さらに質問を投げる
66	IP	そうでもない。		質問に応答
67	Th	ふうん、でも、友達から聞いたんや。でも、あその学校って、ヤンキーいっぱいおるやん。	話題を整理しつつ、理解したことを示す/話題を投げるため新たな情報を提示	Thが知っている新たな情報を投げる
68	IP	(初めて笑って) 関係ない。	緊張が緩む	新たな情報に対する反応を示す
69	Th	まあ、確かにまじめな子もいるけど…。でも、何かやりたいことがあるんかな、あの学校で？	IPの反応に合わせてつつ、さらに話題を広げる	質問を投げる
70	IP	機械のことやりたいねん。		質問に返答
71	Th	機械って、あの車のエンジンとかか？	話題から外れないようやりとりを続ける	質問を投げる
72	IP	そう。		質問に返答
＜中略：この後、話がやや飛躍しながらやりとりが成立し続ける＞				

分析結果③では、情報収集のための対話的なやり取りの形式が定着してくる部分である。

No34、IPでは、『Thの説明に納得』し『自身の状態と関連していないことを示しつつ、一部Thに同意』している形となり、はじめてThのコメントに対して「一部認めるコメントをする」という結果が示された。それに対してNo35、Thは「コメントに対する質問を投げる」ことで『話題を広げる』ことを試みている。以降、No36～No44まで、Thが「質問を投げ」それに対してIPが「質問に返答」という構造となっている。No45、Thで、『IPが応答したことをThが受け取ったことを示す』ためや、『ThがIPを肯定的にとらえていることを示す』ということを行うために、「受け取ったことをコメント」し、「さらに質問を投げる」ことで、No46以降、対話形式のやり取りが続いていることが示された。その間も、No61、Thは『話題から外れないよう、さらに広げる』ために、「ややオープンな質問を投げかける」ことを行ったり、No67、Th『話題を整理しつつ、理解したことを示す』ため、あるいは「話題を投げるため新たな情報を提示」するために、「Thが知っている新たな情報を投げる」ということを行い、やり取りを継続させながらさらに発展させている。

表4. 分析結果④

No	話し手	言語（非言語）的応対	文脈的意図	対応
73	Th	いろいろ話し聞いたけど、しんどなかった？	IP に対して配慮を示す	質問を投げる
74	IP	しんどい。	困りごとをまともに提示	感情的な返答
75	Th	ごめんな。でも、あんまりあなたの状態が大変すぎて、僕、何手伝ったらいいやろ？	謝罪しつつ、心配していることを示す/IP のニーズを探る	謝罪しつつ、質問を投げる
76	IP	……わからへん。		応答
77	Th	そうか、どっから手を着けたらええかわからへんにゃけど、また話し聞かしてくれる？	継続的な来談の構造を作る	再来談が可能か尋ねる
78	IP	はい。	同意	返答
79	Th	じゃあ、また今度来たとき時間ととくから、話し聞かせてください。		確認
80	IP	はい。	同意	返答
81	Th	じゃあ、お疲れさま。	終了の合図	終了の挨拶
82	IP	一つ聞いていいですか？		質問の了解を得る
83	Th	なに？	了解を示す	返答
84	IP	私って変ですか？	自分の中にあった疑問を打ち明ける/Th に対してある程度の信頼性を示す/同時に Th がどのように扱うかということを試している	質問を投げる
85	Th	えっ、どこが？	疑問に思うほど、考えていなかったことを示す	疑問で返答
86	IP	いいです。	話を引込めようとする	応答
87	Th	うん、でも、今日話させてもらったけど、変っていうより、こんな大変な中でようがんばってきたなっていうか、すごい頑張って気を張りつめてたんやろなって、よくここまで自分だけで頑張ってたなって感心した。	IP を肯定的に捉えていることを示し一部ノーマライズする	疑問への説明
88	IP	……そうですか？	IP にとって、これまでにはない反応が返ってきたため、一部困惑	悩んでいる
89	Th	うん、ごめんな、うまいこと答えにならないで。また話し聞かせて。	IP の要求に対応しきれないことへのお詫び/次回来談の念押し	お願いをする
90	IP	はい。	同意	了解する
91	Th	おつかれさま。		

分析結果④では、面接の終盤部分であり、IP の応答性を上げつつやり取りを成立させ、治療契約へと繋げていく部分である。

No73、Th は「IP に対して配慮を示す」ため、「質問を投げる」が、それに対して No74、IP は、「感情的な返答」を行い、Th に対して「困りごとをまともに提示」している結果が示されている。その後、No75、Th で「IP のニーズを探る」も、はっきりとした答えが返ってこなかったため、No77、Th で「再来談が可能か尋ねる」ことで「継続的な来談の構造を作る」ことを行っている。その後、No81、Th で「終了の挨拶」を行うも、No82、IP で「質問の了解を

得る」という前置きがあった後、Na84、IPで「質問を投げる」ということが見られ、「自分の中にあった疑問を打ち明ける」という形で「Thに対してある程度の信頼性を示す」ことが明らかとなった。またそのことは、「同時にThがどのように扱うかということを試している」という結果も示された。Na87、Thで「疑問への説明」を行うことで「IPを肯定的に捉えていることを示し一部ノーマライズする」という文脈的意図であることが示された。それに対し、Na88、IPは、「悩んでいる」対応を見せたが、これは、「IPにとって、これまでにない反応が返ってきたため、一部困惑」しているという結果が明らかとなった。

4. 考察

本研究では、システムズアプローチによる実際の面接場面において、ジョイニングがどのように行われたかについて、探索的に研究を行うことを目的とした。

4-1. 本研究の事例の特徴について

本事例では、IPがこれまでの経緯の中でほとんど他人と関わることなく家に籠っていたり、現状、他人からの働きかけを被害的に受け取っている状態であった。このことから、IPは、必然的に対人場面における緊張感が高くなることや、対人場面における反応に対する応答性の低下、周囲の反応の意図を誤って解釈してしまう可能性が考えられた。そのため、面接においても同様に、IPの緊張感が高いことが考えられ、IPへの様々な投げかけが、そのメッセージの投げ手の意図とは全く異なる受け取られ方をするという、通常の面接とは異なる状況であることが考えられた。

分析結果①より、No.1、Thの対応では、「対話の切り口となる話題を投げ」、コミュニケーションを始めるが、No.2のIPは、(キューとした目つきで反応)していることから、文脈的意図は『拒否・反発』ということが示されている。これからも、周囲の働きかけがIPにとってかなり被害的に映っている可能性があることが明らかである。このような場合、いくらTh側が常識的な配慮をしても、配慮しているつもりが、より相手の被害感を煽る可能性があるということが考えられる。

また、今回は、面接に行くことを促されての来談であったことから、本事例の来談意欲が低いことが推察される。基本的な面接場面での治療的やり取りは、来談者が自身の困りごとなどについて話し、それに対してThが応対する形式となることが多い。来談意欲が低い場合、このような基本的なやり取りが形成されにくいいため、まずはThが面接の入口で、基本的なやり取りとなるよう働きかけることや、やや介入的な働きかけを行う場合が考えられる。分析結果①、No.19では、ThがIPに基本的な治療的やり取りを行うことについての許可を取ってい

と考えられ、それによってそれ以降治療的やり取りが促進されていると考えられる。

4-2. 分析結果について

4-2-1 分析結果①について

前述の通り、本事例では「来談意欲が低いということ」、「IP が被害的になっているため通常のやり取りが成立しにくいこと」という2つの要因が少なくとも考えられた。つまり、まずは応答性の向上が必須であると考えられ、Th が質問を行ったり話題を投げ、それに IP が応答するという形式を作り上げることが必要であると考えられる。No.1「対話の切り口となる話題を投げる」対応を取っていることや、No.3『主訴にまつわる話題の切り口を作る』ために「質問を投げる」ことを行っていた。このように、来談者が困っていることが予測できる話題を積極的に扱い、来談者の応答を引き出し、治療的やり取りの形成を試みている。しかし IP は、No.2 非言語的反応（キュートした目つきで反応）し、『拒否・反発』や、No.4『懐疑的』な意図が含まれる「質問で返答」というように、Th の投げかけに反応はしているが、応答しているわけではなく、治療的やり取りが形成されていない。IP の対応、No.6、No.8、などは、Th に「さらに質問」を行い、治療的やり取りとは何ら関係のない話題を IP が主導で展開していると考えられる。この IP からの反応に対して、Th はすぐに治療的やり取りを形成するために、再び働きかけるわけではなく、No.7「質問に対する内容的コメント」を行い『本人の意図通り応対』したり、No.9「質問への返答」するなどして『本人の意図通り応対』を行っている。これらは、Th が相手の出方に合わせている部分であると考えることができる。

つまり、面接の冒頭部分においては、最低限治療的やり取りを形成するための阻害要因となる様々なバイアス、例えば不要な緊張感であったり、面接の場に対するモチベーションのなさなどを、極力なくす過程が必須であると考えられた。ただしこれをジョイニングと捉えるか、ジョイニングの準備段階と捉えるかは疑問であるが、面接内での応対が始まっている以上、相手が応対しやすい形式や様式を Th が積極的に取り入れていることが推測された。また、治療的やり取りを形成するため、Th 側からその形式となるよう働きかけていることが明らかとなった。

4-2-2 分析結果②について

分析結果②では、前述のように、治療的なやり取りの形式を行うことの了解を IP から得て、Th 側から質問を投げかけるところから始まるやり取り部分である。

冒頭 No.21では Th が「IP が返答しやすいであろう話題から振る」を行い、次の IP の No.22の返答の後、Th が再び No.23で「クローズドクエッション」を行っている。これらは、相

手から治療的やり取りの形式を行う了解を得たからといって、いきなり主訴入るのではなく、クローズな質問であえて IP が返答しやすい話題を扱っていると考えられる。分析結果①の面接の流れからも、この場合にいきなり主訴について話すよう IP に求めることは、IP にとっての負担が大きくなることが予測され、また面接内の緊張感が高まることが推測できる。そのため Th は、これらのことに対応するため、「IP が話しやすいであろう」話題を選択していることが考えられる。また、これは、基本的な治療的やり取りという応対の形式を定着させるため、繰り返し Th が投げかけそれに IP が応答するという形式を行っていると考えられる。

しかし、再び No.25、Th「共感的姿勢を示す」対応に対して、No.26での IP は「共感的姿勢に対してやや反発的」であり、さらに続けて No.28でも IP は「反発」的で「疑問形で返答」し、治療的やり取りとは異なる、むしろ関係性を悪化させる可能性のあるやり取りであると考えられる。これは前述の通り、周囲からの関わりを被害的に受け取ってしまうという、IP との応答性が悪い状態であること、これらのやり取りに影響を及ぼしている側面があると考えられる。つまり、これ以上このやり取りを続けることは、治療関係が悪化する要因にもなりかねないため、No.31、Th は「IP に同意」しつつ「異なる話題を質問」し、No.32、IP から「質問に返答」という対応を引き出し、元の治療関係の形式にやり取りを戻す意図があることが考えられた。また、No.33、Th で、「一般論の文脈に戻すことで、Th の発言が IP の誤解であったことを示唆」するため、「先ほどの Th のコメントの意図を説明」している。ここで IP の反応は、周囲からの関わりを被害的に受け取ってしまう IP の状態から考えれば当然のことで、それに対して Th が、発言の意図を明確に説明することで、IP が被害的に受け取らずに済むように働きかけていると考えられる。つまり、IP の被害的な反応をそのままにせず、発進側の意図を誤解していることを IP に示すことで、通常のやり取りが促進されるよう、また Th と IP の関係性が悪化しないように調整を行っていると考えられる。

4-2-3 分析結果③について

Th は、前述の IP とのやり取りで、メッセージの発進側の意図を説明し、IP の誤解であることを説明した結果、No.34で IP が、「Th の説明に納得」し、「新たな枠組みを提示」している。つまり、ここでは通常の治療関係に近いやり取りが成立していると考えられるが、それは Th に対する IP の期待が上がっているためであると考えられ、良好な治療関係が促進されていることが明らかとなった。次の No.35の Th 対応で、IP が提示した新たな枠組みを広げるため、IP の「コメントに対する質問を投げる」ことを行い、No.36で IP は「同意」し「質問に返答」している。No.37以降「さらに話題を広げる」ため「質問を投げる」「質問に返答する」というやり取りが続き、通常の治療関係が成立していると考えられる。また、そのやり取

りを続け、No.45のThで、IPから「受け取ったことをコメント」を返すことで、IPにとってはどのように相手に受け取られたかが明確になり、IPがThのことをどのような人物か判断する材料としての一要因となることが考えられた。それにより、IPはThのことを判断することができ、どれだけThが自分の話していることを受け取っているかがIPにとって明らかとなる。これは、ここまでのやり取りの中で行われており、ThがIPのメッセージを受け取ったことを示すコメントを行った上で、その話題を広げるために質問を行い、やり取りを継続している。このやり取りは、Thの行為を中心に見るならば、ThがIPの枠組みに合わせる行為であると考えられ、それがTh-IP間の応答性を高めることに繋がっていることが考えられた。また、これは、IPにとってThがどれだけ自分の枠組みを理解しているかということ来判断する材料となるため、Thが相手のことについての枠組みを示す行為であると考えられ、ThとIPの関係性に影響を及ぼすことも考えられる。

これらのやり取りを経て、Th-IP間での応答性がさらに上がり、No.47でのThは、「IPの応答に対してダイレクトに質問」することが可能となり、それに対しIPはNo.48「Thの質問に依存せず、自分から枠組みを提示」している。これまでのやりとりでは、IPが示したことをThが受け取ったということを示しながら、さらにその話題を広げるため質問を行っていたが、ここでのやり取りは、ThがIPの枠組みをどう受け取ったかということを直接言語的に示さず、IPに質問を投げかけ、それに対する返答が得られる状態であり、より通常の治療的やり取りに近い状態であることが考えられ、同時にTh-IP間の応答性がさらに上がっていることも明らかである。以降、Thは話題から外れないようやり取りを続け、話題を広げていくことにより、No.58、IPの「感情的コメント」が出たり、No.61、Thが「ややオープンな質問を投げかける」ことでさらにやり取りの応答性が高まり、情報収集としてのやり取りが成立していると考ええる。

4-2-4 分析結果④について

分析結果④では、面接の終盤部分であり、初回面接のまとめ部分である。

No.74では、IPが「困り事をともに提示」しており、それに対してThがNo.75で「謝罪しつつ、心配していることを示す」ことから、Th-IPの治療的やり取りが成立していることは明らかで、良好な治療関係が成立していることが考えられる。また、No.75ではThが、これまでの面接部分でIPが示した枠組みや話を受けて、IPの状態について心配していることを示した上で、IPのニーズを探っており、これは、ThがIPにとって様々な困難があることを承知している前提で、あえて最優先すべき部分について聞いていると考えられ、IPに対する配慮であるとともに、治療に不可欠なニーズの把握を行っていると考ええる。

4-3 まとめ

本研究で明らかとなったことは、やり取りの様式や形式を相手に合わせることはもちろんのこと、相手の意図そのものに従って Th の対応を選択し、応対することが重要であると考えられる。相手の意図とは、直前の相手から発信されたメッセージの文脈的意図や、それらの繋がりやまとまり、IP の背景情報などを合わせた文脈的なメッセージの意図があり、単純に目前の反応にさえ合わせていけばよいというものではないことが考えられる。また同時にそれとは異なり、面接の状況設定により、Th の対応を選択しなければならず、それらを含めた対応が必要となる。今回では、治療的やり取りを行うために、相手の意図に合わせることは別に、Th が治療的やり取りとなるよう働きかける必要があり、そのような Th 側のいくつかの意図を含んだ上で、相手の意図に合わせる対応が基本となることが考えられる。

ジョイニングが治療関係構築のために必須であることは先にも述べたが（吉川，1993）、面接展開の中で常に関係性に与える影響を考慮し、それを天秤にかけた上で治療的な働きかけが成立するというように、関係性構築することはもちろん、それを保つことが重要であり、そのためには、分析結果④のように面接終盤であっても相手の示す枠組みに合わせる事が不可欠であると考えられる。

5. 今後の課題

本研究では、分析に用いられた事例が「来談意欲が低いということ」、「IP が被害的になっているため通常のやり取りが成立しにくいこと」という前提があった。そのため、さらに異なる前提の事例におけるジョイニングを探索的に検討することが今後の課題であると言える。つまり、来談意欲が通常の事例や、個人ではなく複数での来談の場合などでも、今後検討することが必要であると考えられる。

引用文献

- 久持修（2005）初回面接におけるジョイニングに関する実証的研究、秋田大学臨床心理相談研究、5、pp. 43-53
 久保山武成（2005）効果的なジョイニングに関する研究、秋田大学臨床心理相談研究、5、pp. 37-42
 東豊（1993）セラピスト入門、日本評論社
 吉川悟（1993）家族療法、システムズアプローチの「ものの見方」、ミネルヴァ書房
 吉川悟（2004）セラピーをスリムにする！—ブリーフセラピー入門 金剛出版
 Minuchin, S. (1974) Family and family Therapy. Harvard University Press, Massachusetts.
 （山根常男訳（1984）家族と家族療法. 誠信書房.）
 遊佐安一郎（1984）家族療法入門—システムズアプローチの理論と実際 星和書店